

Filippo Sassetti のサンスクリット紹介について

坪 内 章

1

どんな簡略なものでもおよそ言語学史と名のつくものをひもとくと、今日の言語学は、XIX世紀初頭の比較言語学をもって幕が開かれたと書いてある。その比較言語学は、古代インドの言語、サンスクリット語の西欧人による発見に促がされたとある。そしてそのサンスクリットを西欧人に初めて紹介したものは、イタリア人 Filippo Sassetti だと、たいてい書いている。だがその Sassetti とはどんな人物で、どのていどサンスクリットと近代ヨーロッパ語との関連を示唆したのか、その点にはいっこう触れていない。わたしは、Sassetti について決して詳しいものではないが、さいわいかれの書簡選集を手に入れたので、それによってかれのサンスクリット紹介の実情を調べてみようと思う。

2

Filippo Sassetti は、文芸復興黄金時代のイタリアはフィレンツェに、商業で知られた旧家 Sassetti 家の Giambattista とその妻 Gondi 家の Maddalena との間に生まれた。1540年9月26日のことである。長じてから一時銀行に勤めたが、好学の志やみがたく、1568年ピサ大学に入り、そこで6か年の研究生を送り、1574年生地に帰って Accademia Fiorentina に加わり、翌年 Accademia degli Alterati の一員となった。その会長は文学・経済両方面の才にたけ、Tacitus の全訳を残した Bernardo Davanzati であった。1577年、兄 Francesco の家運衰微のため、自分の生活の基であった資産をこれに譲って、かつて父がかれのために定めた針路である商業に転じたが、学業はいぜんとして廃さなかった。1578年、衣料商 Capponi 家の代理人としてセビーリャ、リスボン、マドリードに旅行し、その見聞を手紙に書いて郷里の友人に送っている。そのなかで、ポルトガルの商業活動に言及して、カリクレーヤゴアのあるインドの海岸からマラッカ、シナを経て日本 (Giapan) へゆくこと述べ、またどれいにかんするくんだり、日本人 (Giapini) に触れ、かれらはオリーブ色の人種で、ここ (リスボン) にいて、どんな仕事でもよろこんでると書いている。見聞に値するものは何でも見てやろうというルネッサンス精神は、すでにそのころのかれの手紙からもうかがわれる。1581年リスボン発の手紙によると、S はすでにインド行きを決心しているようである。そのころ Capponi 家は、スペイン、ポルトガルの商人たちとの競争に敗れ、その地の店を閉鎖することになり、S はやむなく Giovambattista Rovellasco というポルトガルの豪商のもとに、3か年勤める契約を結んだ。これはスペイン国王からこしょうの専売権を得ている商人で、S はかれの商売の監督としてインドに趣き、ポルトガルの商品売り込んでそのかわりこしょうを手に入れねばならなかった。かつてこしょうは、貨幣同様に珍重されていたことは、いまさら言うまでもなからう。かれはこの任務をおびて1582年4月リスボンを出帆したが、5か月にわたる難航のすえ辛じて元の港に逃げもどった。その翌年2月、トスカナ大公、メディチ家の Francesco I にあてた手紙によ

ると、大公から 500 ducati, その弟 Ferdinando 枢機卿(のち還俗して大公の跡をつぎ、公国の貿易を振興した)から同じく金貨 300, 計 800 ducati の大金を預かり、さいわいインドについたらこれを二人のために活用するとともに、かの地の事情を詳しく知らせようと約束している。その年 4 月 8 日、改めてインドに向けて出帆、7 か月の航海ののち 11 月 8 日、インド、マラバル海岸のコチンに上陸した。

他の 4 隻の僚船は、5 か月の順当な航海で、しかも途中モサンビクで 20 日余も上陸して休養した上で、ゴアに着き、早くも商売を始めていた。かれの船だけは、水先案内の不明のため 7 か月も漂流し、魚けならぬのがふしぎだと冗談を言っている。だがビスケットと黄色い水だけで命をつないでいたので、800 余名の乗員のうち 160 名が、まず歯茎がはれて悪臭を発し、つぎに脚がはれて発疹し、ひじょうに苦しむ病い(Raya の注によると瘰癧症)にかかり、倒れるものが続出した。S. は辛じて免れたようである。

以後、コチンと、その北に位するポルトガル人のインド方面最大の拠点ゴアとに居住すること 5 年たらず、1588 年 9 月 3 日、ゴアで同僚 Neretti と女どれいとに看取られて死んだ。なお女どれいが数か月前に生んだかれの男児も、そのご 2 年して死んだという。こうして再び故郷の土を踏むことなく、また晩年枢機卿あての手紙に打ち明けている Dante の Ulisse のような希望、マラッカ、モルッコ、シナ、マニラ、さらに新スペインその他インド諸州を回って帰国したいという希望も果たさず、異郷に客死したのである。

だが、かれの文筆上の業績は案外多い。(1) フィレンツェの愛国者 Francesco Ferrucci の伝、(2) Castravilla にかいた Dante 擁護論、(3) アリストテレス詩学の解説、(4) アリオスト批議、(5) フィレンツェ東方人間貿易論、(6) 事業にかんする教え 2 編。なお Niganto と称する薬草事典のようなものを、インド人の説明を頼りに訳出したらしいが、これは残っていない。

以上すべてを集めたよりもはるかに重要な意義をもつものが、110 余通残っているかれの書簡である(1855 年、Le Monnier 社刊、Ettore Narcucci 編注の“Lettere edite e inedite di Filippo Sassetti”には、111 通収めてあり、そのごなお数通発見されている模様)。いずれも、ルネッサンスの人文主義者として、未知の国の旅行者として、また商人として、見るもの聞くものを鋭く観察し、それを淡々と、処々にユーモアを交えて書き綴ったもので、史料として貴重であるばかりでなく、文学的にみても面白い。それゆえ文学史家として XIX 世紀に重きをなした A. Bartoli は、中等学校教科書用の詩文選に、そのなかの 10 通も採録したといわれる。

(注1) この手紙の相手が、当時フィレンツェで古典語の教授としてもっとも尊敬されていた大先生であることを想い合わせると、この感想はなおさら面白い。

(注2) Pāṇini の文法をさすものであろう。

(注3) この観察は珍妙である。

(注4) 原語の saṃskṛta の母音 ṛ は、ふつう ri と写されるのを、ここでは ru としたのだ。

(注5) サンスクリットでそれぞれ śaś, sapta, aśtāu, nāva, deva, sarpa という。

しかしここで問題にしたいのは、かれのサンスクリット紹介の文章である。それは2通の書簡の、それぞれ一部分をなすものである。

まず、1585年1月27日付コチン発、Piero Vettoriあての手紙の中程に、つぎのように書いてある。

Parmi che noi possiamo dire che sia infermità di questo secolo che in tutte le parti del mondo le scienze sieno in lingua differente da quella che si parla ; della quale malattia è toccato tambene questa gente tutta , perchè tanto è diversa la loro lingua da quella nella quale è la loro scienza, che a impararla pongono sei anni di tempo ; avvengachè non faccino come li Ebrei, che insegnano la lingua delle leggi a' figliuoli loro, come s' insegna tra noi parlare a' pappagalli ; ma costoro hanno la grammatica, e se ne servono.

La lingua in sè è dilettevole e di bel suono, per i molti elementi che egli hanno fino a 53 ; de' quali tutti rendono ragione, facendoli nascere tutti dai diversi movimenti della bocca e della lingua. Traducono nella loro facilmente tutti i concetti nostri, e stimano che noi non possiamo fare il medesimo de' loro nella lingua nostra, per mancare della metà degli elementi, o piu. E' il vero che a proferire le parole loro con i loro suoni ed accenti (che è quello che e' vogliamo dire) si ha molta difficoltà ; e stimo che ne sia causa in gran parte la differente temperatura della lingua, perchè mangiando questi ad ogni ora quella foglia di erba tanto eccellente, che domandano betle, che è astringente e diseccativa in gran maniera, con quel frutto che domandano areca, che anticamente chiamavasi avellana indica, e con gesso tutto mescolato, hanno conseguentemente la lingua e la bocca asciutta e veloce, e noi per lo contrario.

「世界各地において、学問が話し言葉とは異なる言語でなされるのは、この世紀の病弊であるといえはしまいか。(1) この病いは、この種族[パラモンたち]も免れない。かれらの言語は、かれらの学問がしたためられる言語とは大いに異なり、これを習得するには6か年を要するほどである。まさかわれわれがおうむに言葉を教えるあんばいに自分の子に律法の言語を教え込むユダヤ人のまねこそしないが、かれらには文法があって、(2) それを用いている。

この言語はそもそも53個にも及ぶ多数の要素のため、気持ちよく、聴いて美しい。かれ

らは、口や舌のさまざまな運動によってそのすべての要素を発音して意を通じる。かれらはわれわれのどんな概念をもやすやすとその言語に翻訳するが、われわれがかれらの概念をわれわれの国語に移すことは、その要素の半分ないしそれ以上を欠いているので、できない相談だと思っている。なるほどかれらの音やアクセントでかれらの言葉を発するのは、なかなかむずかしい。(かれらの言いたいのはこのことだ) 思うに、舌の温度の異なることが、そのおもな原因であろう。というのも、かれらはひどく収斂性と乾燥性に富むキンマという卓効のある薬草の葉を、古くはインド榛の実と呼ばれたピンロウジという果実と石灰によく混ぜて、四六時中食べているので、かれらの舌も口も従ってかわいて敏活になるのに、われわれはその反対だからである。(3)

もう一通は、前述の Davanzati あての、年月・発信とも不明の手紙で、腐った血に特効があり、ライ病をも治すという植物 *cadirà* について長々説明したのち、つぎのように書いている：

Sono scritte le loro scienze tutte in una lingua, che dimandano Sanscruta, che vuol dire bene articolata : della quale non si ha memoria quando fusse parlata, con avere (com'io dico) memorie antichissime. Imparanla come noi la greca e latina, e vi pongono molto maggior tempo, sì che in 6 anni o 7 se ne fanno padroni : ed ha la lingua d'oggi molte cose comuni con quella, nella quale sono molti de' nostri nomi, e particolarmente de' numeri il 6, 7, 8 e 9, Dio, serpe ed altri assai. De' loro dottori scrisse Plinio facendone menzione come di filosofi, Erodoto, scrittore antichissimo, fa menzione di questi Bragmeni, e loro costumi ; sicchè non è da farsi beffe della loro opinione che le scienze siano uscite di qua.

「かれら〔バラモンたち〕の学問はすべて Sanscruta⁽⁴⁾ と呼ばれる言語で書かれている。これはよく整備されたという意味である。これについては(すでに申し上げたように)きわめて古いという覚えはあるのだが、いつ話されたかは不明である。われわれがギリシャ語やラテン語を学ぶように、かれらもこの言語を学ぶが、それにははるかに長年月を要し、完全にこなすには6年なり7年なりかかる。今日の言語には、この言語と共通のものがたくさんあり、わがイタリア語の名詞の多くが、そしてことに数詞のうちの6, 7, 8および9, それから Dio「神」、Serpe「蛇」⁽⁵⁾その他等々が、この言語にある。かれらの学者について Plinius も哲学者として言及しているし、最古の著作家 Herodotos も、バラモンたち(Bragmeni)やその風習について述べているのだから、学問はここから始まったというかれらの考えもばかにしてはならない。」

両方合わせてもきわめて簡単なものではあり、珍妙な観察もふくまれているが、これによって Sasseti が、母音 13, 子音 35, その他の記号 5 から成るサンスクリットの音韻体系を理解していたこと、サンスクリットと近代ヨーロッパ語との間に多くの単語の類似

を認めたこと、さいごに、かすかながらその両者の間に親近性のあることを感じていたことが読みとれるであろう。

そのご XVIII 世紀にいたり、ドイツ人 B. Schulze, フランス人 Père Coeurdoux が、同様の趣旨を故国に報じたが、ほとんど顧られなかった。ところが 1786 年, Sir William Jones がカルカッタのアジア協会であの名論を発表するや、それがたちまち比較文法誕生に機縁を与えたことは、すでに世に周知のことである。ただ一言、印刷術の今日ほど普及していなかった当時においては、書簡というものは、親族間などでとくに極秘と断つてあるばあいを除き、一般に宛名人が見るのみならず、その友人たちの間で回覧される慣わしであり、発信者もその心組みで、半ば著述するような態度で筆をとったものと考えていいことを、付け加えておこう。書簡文学を味うにあたっては、昔と今と、はっきり区別してかかることが肝要である。

〔付記〕—使用文献は：Filippo Sasseti, Lettere scelte, con introduzione e note di Gino Raya. Vallardi, Milano, 1933. その他本稿を草するにあたって参照したものは：D'Ancona e Bacci 編, Manuale della letteratura italiana, vol. III, Renda-Operti 編, Dizionario storico della letteratura italiana, 1959, Enciclopedia italiana. なお、引用文には編者の Raya が多少手を加えて読みやすい正書法に改めた模様である。

(実践女子大学教授)